特別講演

農の思想を考える

哲学者　内山　節

（1）私の農業

収穫ゼロを体験

時々職業は何かと聞かれて，農家・林家と答えることがありますが，そんなにまじめにやっている訳ではなく，僕の農業も山の方も遊び程度です。本当はもう少ししっかりやりたいのですが，なかなか村にずっといることもできないので，時々村に行ってやっているという程度です。

今，私がいるのは群馬県の上野村です。この村に25年ほど前に初めて魚釣りに行きました。魚釣りばかりしていたら，村の方が「魚釣りも面白いけれど，農業はもっと面白いから少しぐらい遊びでいいからやってみないか。」と誘われました。やってみるとこれが面白くて，わずかな面積ですが農業歴はもう25年強くらい。細々と畑を耕しています。

ただこの春から夏にかけて，やることがいっぱいある季節で，色々対策を練らなければなりません。25年ほど農業をしてきて，昨年初めて秋に収穫ゼロを経験をしました。何にも取れないないことは農業ではあり得ません。収穫ゼロになった理由は簡単です。僕のところは秋には畑しかありません。野菜と豆類を作っていますが，豆はイノシシが，大根や白菜は鹿が全部食べ尽くしてしまいました。そのために収穫ゼロです。鹿とイノシシが群になって来られると，もうどうにもなりません。

山を追われた動物たち

僕の農業は，別に農業収入がある訳でもないので，食べられてもいいのですが，作る前から食べられることを覚悟する訳にもいきません。今年は，ジャガイモの植え付けの後，イノシシよけのフェンスを張りました。順番に色々対策を練ります。

ただ動物も奥山を相当追われています。どうしても餌のある里山に移ってきています。里山の方が木が若く，餌になるものが沢山あり，畑のすぐわきまで来るのは仕方ありません。ですから動物の動きは，山のものの出来次第です。山のものが出来が良ければちょっと対策を打っておけば，不気味な里山等には寄ってこない。しかし，山に食べ物がなければ無理して突破して来るに決っています。

イノシシとの知恵比べ

こうなると人間が何をやってもダメです。隣村で，春先にジャガイモを植えた方が，植えた次の日には，イノシシに種芋を全部食べられました。もう一度植え直しをして，今度は高圧電流の鉄線を張られましたが，また食べられてしまった。イノシシも頭に電流がぶつかるとショックが激しい。お尻はそうでもない。それで，穴を掘ってお尻から入るということを，わずか一日で覚えてしまった。頭がいいもんです。たまたま入るところを見たそうです。こういうものを相手にしますので，相手がその気になれば少々のことをしてもダ

メです。

僕のところも春先，ジャガイモ畑に張ったフェンスのところまでイノシシの足跡が付いていました。フェンスのところでUターンしています。フェンスが危ないと思ってくれたのならいいんですが，フェンス越しにジャガイモを見て，まだだなあ，来月来よう，なんて帰ったんならフェンスはほとんど意味なしです。

村の農業も考えなけりゃいけないことが沢山あります。そんなことを細々とやっています。

ただ残念なことに毎日村に居るわけにいかず，行った日は朝から晩まで村で一番勤勉な農民じゃないかと思うくらい農業をやってます。おかげで今日はフラフラするくらいくたびれています。そんなことを自己紹介代わりにさせていただきます。

群馬県，上野村

ところで，話の中で「私の村」というのは群馬県上野村の話です。ここは本当に山間地です。ここに来た時に迎えに来て下さった方と利賀村の話が出ましたが，我が村と比べたら利賀村は広大なる大平原です。

上野村は，V字谷の底みたいな村です。村の94％が森林，河川が2％，残り4％に人が住んでいる囲い村です。村中，水田が全くありません。全て畑作。そして平らな畑は全くなし，全て傾斜地。

僕の畑はわずか5畝ですが，我が村では5畝の百姓は大いばりで，3反も持っていたら大百姓です。そんな村で，細々と農業をやっています。

（2）自然との関わりを求めて

明るい表情のヨーロッパの農村

もう一つ別の関心で，ヨーロッパ全地域，主としてフランスに1年にいっぺんくらい足を延ばしています。これは他の先進国と日本とを比較するため，継続的に調査しています。ポイントはフランスですが，フランスでもやはり都市というのは長くいると飽きて，ちょっと暇ができると魚釣りに農村や山村に行ったりしています。そんな話も交えながらお話しようと思います。

ところで，日本よりもヨーロッパの方がはっきりしているのかもしれませんが，率直に言ってヨーロッパの先進国を見ていて，あまり明るい未来を感じません。

と言うのは，都市で暮らしている人の表情がとても暗くて，険しい。もっと言えば非常にイライラしている。これはヨーロッパの失業率がたいへん高い等の問題もありますが，とても精神的に余裕がない人達が多い。特に都市部でよく感じます。

ところが，ヨーロッパの農山村というのはどこも比較的しっかりしています。農山村で暮らしている人達はとても元気がよく，明るく，余裕がある。収入は決して多くはありませんが，どこの国でも農業に関わっている人達は，とても元気な表情をしています。それが都市部に来るほど非常にイライラしている人達が多い，というのが率直な印象です。

こんな表情を見ていると，都市とか巨大産業を軸に形成されてきた先進国が，このまま保つだろうかという気がしてきます。経済システム云々ではなく，そこに暮らしている人たちが，今のままで生き続ける事ができるだろうか，どこかで破綻するのではないかと思います。それも経済的破綻だけでなく，人間性の破綻を来すのでは，ということを感じさせます。例えばパリのような町に行きますと，皆さんとてもイライラして暮らしているのが現実です。

ヨーロッパでは農業は，人気産業

ただそういう社会ムードの中で強く感じるのは，ずいぶん多くの人達が土や自然と関わる暮らしを何とか取り戻そうとし始めている

という気がします。

例えばヨーロッパの場合，農業は人気産業で，後継者がいない農家が出ると，後継希望者がどっと集まります。イギリスでは，公募することもあります。「農業後継者求む」と出すと，沢山の人が来ます。面接等して，良さそうな人を試験して，その人に農地を渡していく。ヨーロッパの場合は，渡すというより買い取ってもらう方が多い。

ドイツは特に多いのですが，親子でも買い取る形で相続する。農地の値段は安いでので，無理せずに買える。お父さんが引退する時に子供が買い取り，継承していく。自分の家に跡取りがいなくても良さそうな人に譲っていく。そんな時，応募者は沢山います。

また都市部，特に地方の中小都市では，非常に多くの人達が家庭菜園をやっています。広さはせいぜい5坪くらいですが，多くの市民が夕方になると自分の農地に行って，わずかな土地に色んなものを植えて楽しんでいます。

こうを見ますと，本当にわずかでも土と関わりながら生きたい，人間の生き方を回復したい，との傾向が，本当に広がってきた気がします。

自然との関わりに殺到する人たち

この傾向は日本でも似たところがあって，東京なんかで家庭菜園，市民農園を募集しますと大変な倍率です。

今，僕は森林ボランティアの顧問をしていますが，このボランティアは土日に無償で森林の手入れをします。富山には草刈り十字軍がありますが，森林ボランティアは，この10年各地でものすごく広がり，森林の手入れをしています。もちろん山までの交通費を含めて一銭もでません。無償です。このように森と関わろうとする人達がずいぶん増えてきました。今年の春，私共が林野庁等と協力して開いた全国集会では，定員500人に，応募者が800人くらいでした。実際はもっと多い人達がいると思います。少し前と比べると無償で他人の山を手入れする人が本当に増えてきたという気がします。

これらも，今，多くの人達が自然や土とのつきあいを生活の中に取り戻さないと，人間として生きていくことが苦しくなってきている，そんなことをかすかに感じ始めているのではないか，という気がします。そんなことを考えながら，今日のテーマの「農の思想を考える」に入っていきたいと思います。

（3）過去，「百姓」は多職の民

農民は，「職人」でもあり

私は，農家の出身ではありません。農業については，全く知らずに群馬県の村に行って，少し始めたということです。

しかし，農業をやり始めると色んな事が分かってきます。それは，専門家や研究者や色々な人々と話をしますと，自分が学校で習ってきた農民観が間違っていたとの，率直な気持ちです。

というのは，農民とは，田畑を耕して暮らしている人々，と私たちは習いました。もちろん農民が田畑を耕すのは当然ですが，田畑だけで生きているのが農民というのは間違いではないか。つまり，農民が田畑だけで生きようとしたのはむしろ戦後であり，もう少しさかのぼっても，明治以降ではないか。それ以前の農民はもっと色んな仕事をしていた，というのが最近の歴史社会学等での見方です。

つまり，農民というのは傍ら「工（コウ）」とか，「職」とか，職人的な部分を必ず持っていた。例えば，冬場，雪が降っている時は家の中で機織りや，細工ものの職人になり，いろんな職人仕事をしていた。

農民は，「商人」でもあり

それから，これは全てではありませんが，商業との結びつきを結構強く持っていた。富

山県ですと，冬場，農民は売薬となり，商人としての一面を持っている農民がたくさんいました。塩なども，塩の道を通して運ばれ，それを行商人が一軒一軒売るのではなく，点々と農家に塩を置いていく。そして，その農家が塩の小売商となる。ですから塩商人をやりながら農業をやる。そうして塩が村々，各家に回るのが普通の形態でした。

農民の出稼ぎは，渡りの「技術移転」

また出稼ぎは，お金がなく，しかたなく働きに行くイメージがあります。しかし，実は農民生活の中に出稼ぎは昔から組み込まれており，むしろ1年の労働体系の中で，ある時期にはある所に技術を持って働きに行く。ですから出稼ぎは「悲惨」ではなく，一種のわたり職人です。越後の杜氏さんは酒造りの時に出かけて行く。

このような形態は，各地に色々ありました。和歌山県のある村では，村ぐるみ河川土木技術者で，春から秋まで村で農業，冬になると全国にグループごとに頼まれた所に移り，河川改修やる。この人達は，農業用水改修等，地元ではできない難しいことをやる。そして河川土木者が集団化した村となる。

このように，一定の技術を持ってある時期どこかで仕事をする。そんな面も農民の一部だったようです。

農民は，余業の集団

また最近では歴史社会学では，ずいぶん「余業」という言葉の研究が進んでいます。農家における余業とは何かの研究です。つまり，田畑以外にどんな仕事をしているか。

私の友人の余業研究者に聞きますと，田畑が主体なのか，余業が主体で田畑が余業化しているのか，よく分からない農民が江戸末期には沢山いたとの事です。つまり最近の研究によると，農民は確かに一面では田畑を耕していた。けれども，もう一面では山の仕事をし，職人であり，商人であり，さらには出稼ぎのような形で各地域に出かけて自分達の技術を生かす，そんな仕事もしていた。つまり農民というのは，多様で総合的な仕事をこなし，決して田畑だけ耕していたのではないということです。

技術を豊かにした畑作物

特に水田だけでなく，畑は中世農民，つまり江戸時代以前の農民でも畑をずいぶん作っています。

ところが，畑物は沢山作った場合，商品や再加工商品として出荷するルートを持っていないと，沢山作ることは無意味です。2反も3反も自家用野菜を作っても，一家では食べ切れません。また当時は輸送は楽じゃありませんから，重いものは輸送に適さない。米のような必需品は別ですが，白菜とか大根等重い物は，川舟輸送がない地域ではうまくいきません。ですから，畑を広く持つことは，軽くて値段の高いものを作って出荷しないと，広い面積の畑作は考えにくい。

私の上野村も畑作ばかりですが，昔は桑畑が多くて養蚕もやり，また，楮を育てて和紙を作っていました。最終的な生糸や織物や和紙等，最終商品がすごく軽い。重さの割に値段が高い。

このように，畑作地帯は加工技術を持ち，それを商品として出荷するルートを持っている。この点からも，昔から農民は総合的な仕事をして，その総合的な仕事の中に農業的な部分が組み込まれていた。それを農民と呼ぶ，というのが最近の研究傾向です。

（4）昔，農村は宝の山

消えた草刈り場

それが現在では，農民は単に田畑で暮らす人達であり，さらには気がつくと田畑だけでは暮らせない農民の方が圧倒的に多く，農民の兼業が現実になっています。ただ，今の兼

業農家と昔の色んな余業としての兼業では根本的な違いがあります。

昔の農民たちの最大の基盤はその地域にある自然体系を全て上手に使い尽くすのが農民の基本でした。

ですから，今と昔の農村景観の違いは，一つは草刈り場が今の農村にはほとんどなくなったことです。昔は牛や馬を飼うため，草刈り場は重要であり，さらに肥料としても使われます。ですから，本当に草深いのが農村景観だったはずです。畦道や畦畔，田んぼや畑の土手などで，大変いい草が取れた。ですから，畦もずいぶん広い畦を持っていました。そこの草が重要な役割を果たしている。

また山は，雑木や枯葉など燃料や山菜，木の実など，色んな意味で重要だった

水田は単に米作りの場にあらず

また，水田は単に米を作る場所ではなく，かつては水田漁業というべきものがあった。ドジョウ，タニシ，タガメ等も広い地域で食べられていました。また水田だけではなく，用水路，河川など，全体として一つの漁場として内陸部では大きな役割を果たしていました。

また，畦道は今は単に通路ですが，昔は必ず畦に大豆が植えてあり，畦も農地として使われていた。さらに新潟なんかでは，畦の真ん中に桐の木が植えていた。これは，畦畔林業と言っていいと思います。このように，木の栽培地としても畦を利用する。

つまり昔の農業は，その地域の持っている自然体系をとことん利用する。しかし，上手に利用するには，利用できる技術がないと利用できません。ところが，昔は，その技術をちゃんと持って暮らしていました。

自然のすべてが，生活必需品

有名な青森県の白神山地の弘前側の裏に西宮村という村があります。昔，弘前大学の先生がされた調査によりますと，村の人達は日常生活で山の草木の150種類くらい使っていたそうです。

用途に応じてそれぞれ建築用，家具用，道具用等に使っています。鍬の柄等も自分で作りますから，ある種の木が道具用材として重要になってくる。もちろん山菜や漢方薬などの薬用として使ったものもある。さらに神事に使った草木や，おもちゃづくりに適した木，さらに紙の代わりに使った箱など，色々あります。

これら，150種類の草木を使ったという事は，ただ150種類の草木を取ってきたのではなく，それらを利用できる形に加工する技術を村の人達はごく普通に持っていたということです。大変な驚きです。

多職の民，農民

これは大変なことです。このような多彩な技術をもっているからこそ，地域の自然体系を全体として上手に使うことが出来た。そして，農民はそこを拠点にしながらも，場合によっては自分の培った技術をよその場で生かすなど，非常に総合的な仕事をしていた。

ですから農民の形態は地域によってうんと違うわけです。つまり水田が大きな比重を占めている農民，畑作中心の農民，職人的な仕事の方が主だった農民，商人的な方が主だった農民もいた。

だから農民の形はどうでもいい。ただ農民というものはその地域の自然体系を上手に使い，かつ傍ら水田や畑を維持しながら，多様な職業を持った「多職の民」として暮らしていた。というのが農民の本来の姿だったのではないか。このことを少々我々は，忘れすぎてしまっている。今はそちらの研究者たちが精力的に農民像を正確にし，転換しようと努力しています。

（5）農的な生活を取り入れた人が，農民

五畝の農作物を楽しむ人も農民

今日，私たちが農業を考える場合，もちろん農業を大事にするというのが基本ですが，もっと農業を多様な形にしたらどうだろうか，と思います。

最初に私が時々農家・林家と答えると言いました。わずか5畝で生活できる訳がありません。私の生産物は自分と友達の消費で終わり，農業収入ゼロ，逆に毎年巨大な赤字を出している農民です。しかし，私が時々農民というのは，格好をつけているのではなく，自分にとって生活体系の中で捨てたくないものとして農的な部分がちゃんとあるということです。ならばこういう農民がいたって別にいいのではないか。これも一つの農民の形だと思うからです。

市民農園をする人も農民の形

ですから，例えば都市部の市民農園のようなわずか5，6坪の農業であっても，それをきちっと生活の中に組み込んで持続させている。これもわずかですが，やはり農民の一つの形と言ってもいいのではないか。

ですから，一方では専業農家のような大規模な農民ももちろんいる。他方，ささやかですが自分の暮らしの中に農の営みを組み込んでいる人達もいる。これも農民の形と考える。

こうした中で地域の自然とどう結びつき，どう守るのか。そういうものとして農業を復権させる。今の農民の人達の農業を守るだけでなく，もっと多くの人達が農業という営みをどんな形であれ生活の中に持っている，そういう形での農業を復権させる。こういう農業復権の道を同時に考えてもいいのではないかと思います。

農業に対する社会的要請

実際，農業に対する社会的要請の一つは，農作物を供給することです。しかし，同時に多くの人達はその作物が安全，かつおいしいものを希望している。つまり，食料はただ作れればいい，ではなくなっている。

さらに，農山村の自然環境を農民がどう守ってくれるかに対しても，社会の要請が大変大きくなっている。さらに農山村が農業と結ばれた文化，これの維持も非常に大きな社会的課題になってきている。これらが，現在社会が農業に対して希望している事ではないかという気がします。

だから食べ物の生産だけではなく，食べ物の安全性や味の問題，農山村の自然環境を守る問題，農山村の文化の問題もある。こういうものをひっくるめて農業に期待し始めているというのが，今日の現状ではないかという気がします。

（6）ヨーロッパの農業政策

高い食糧自給率

何故，そんなふうに思うか。ヨーロッパに行きますと，ヨーロッパの農業政策はこの10年ぐらいに大きな変換を遂げて来ました。私達が子供の頃は，イギリス農業は崩壊的で全然ダメだと教わりました。ところが，今，イギリスの農民たちはイギリスで輸入しなければならない農作物はコーヒー豆とバナナだけである，という言い方をします。実際そうでもありませんが，イギリスでできるものは全部イギリスで自作できるということです。ちなみに今イギリスの農村の自給率は80％くらいです。

ＥＣ諸国というのは，殆どの国が 100％程度の農産物の自給率を持っています。ただ実際，食糧自給率 100％というのは過剰であり，やっぱり８割くらいが事実上の100％自給だろうと思います。というのは日本でもコーヒー豆や，南方系の果物等は外から入ってくるでしょうし，日本で作るのに適していないものも沢山あります。ですから，完全100％とい

うことは考えにくい。

農業政策の大転換

その点を考慮すればヨーロッパというのは，政府の農業保護策によって大変強い農業基盤を持っているとも言えます。ヨーロッパの戦後の農業政策の基本は，大農経営の促進であり，農業生産力の強化でした。ところがこの10年前くらいからガラッと変わってきました。

ひとつの考え方としては農業の経営単位は家族経営規模で維持できるくらいの農業が一番いい，という方向に変わってきました。その意味では小農の推奨という方向です。ただ戦後ずいぶん規模拡大しましたので，フランスなんかでも10haくらい持っている農家が多い。ただ大農経営優先的な政策はやめ，むしろ家族単位で目が届く範囲のものにしていく。

環境保全型へ

さらに，農業は環境保全型でなければならないという考えが，大きく入り込んできました。実際には粗放経営の推奨に移ってきました。

私は，フランスなど行きましても，暇があるとすぐに魚釣りに行きます。僕が好きなのはピレネー山系の川釣りですが，悲惨なのは川の水が飲めないことです。スペインとの国境のピレネー近くの村では，今の季節は山の上はまだ雪が残っています。本当に山また山の所です。

山村にバスから降りて，ホテルを取りますと，ホテルの人に必ず注意されます。「川の水は飲むな」，「湧き水も飲むな」と言うことです。水は必ずミネラルウォーターか，ホテルの一回沸騰させて冷やした水を使えといいます。

水に警戒するのは，寄生虫が多いからです。川水の栄養分がものすごく多くて，源流の滝のように水が落ちている所でも，石などに苔がびっしり生えています。栄養度が大変高いことがよく分かります。これは山間地の山肌のほとんどが畜産団地化されている。つまり，牛や山羊や羊などの放牧地になっている。放牧地というのは，外から見ると草原ですから，見た目にはとてもきれいです。ところが，放牧地に入ったとたん，グチャングチャンでとても歩きにくい。つまり糞尿です。そこから川に水が入りますから栄養分も多く，寄生虫も多い。こんなふうに，川を源流から汚している。

環境保全による減収を，直接所得補償

そこで，畜産に対して1ha当たりの家畜の頭数を減すことが，今，各国政府の農民に対する要請です。つまり，高密度で農業やってもらっては困る。さらに，放牧地で化学肥料や農薬を使うのも困る。できるだけ自然を維持できる範囲で農業をやってもらいたい，との政策に変わってきている。

しかし，それでは当然農民は頭に来る。理念はよく分かるが，それでは生活できない。粗放でやれ，薬品は使うなでは食ってけない。そこで，今，ＥＵ諸国では，環境保全のため農業を変えて，その結果減収した場合は，その分を国が直接所得保障するという方針に切り替えてきました。

これは色んなシステムがあり，複雑怪奇です。フランスやドイツでは，農家の年収が約300万円です。その内農産物（畜産を含めて）による所得が150万くらい，政府の所得保障が150万くらいです。ですから収入の50％くらいが直接所得保障として政府から金が払われている。これは政府とは限らず，政府と州だったり，政府と県だったり，非常に複雑です。つまり，だいたい山間地の農民の収入の半分は税金でまかなわれています。ですから，それだけお金を使っても農業を国が守っていこうとしています。

さらにその守り方が，ただ生産力増強ではなく，環境保全主体に守っていく。しかし，

環境保全主体になれば農民の側はハンディキャップを負う，それを公的資金で保障しよう，そういう政策にだんだん切り替わってきている。これも勿論賛否両論あり，中には面白くないという農民もいます。

というのは，半分公務員のようですが，一方補助金はただはくれません。毎年，ちゃんとした計画書を出して認定を受け，それがきちんと守られているか審査されます。これでは，どうも国に監視されながら農業やっているみたいで，おもしろくないという農民も沢山います。

ただその流れは，もはや農業とは農業生産だけではなくて，作物の安全性や環境保全を含んだものであり，何かがが破綻するような農業は農業ではないとの考え方がヨーロッパでは広く国民に納得されてきている。そのためにお金を使う事に対して，もちろん反対もありますが，少なくともそのような政策が支障なくできる程度に，多くの国民が承認しているというふうに変わってきています。

大規模経営から家族農業へ

同時に，環境保全型農業とは何か，ということが盛んに議論され，結局大規模農業はだめだという方向です。つまり家族の力ぐらいで目が届く農業が一番環境に優しい。さらに，伝統農業が一番環境に優しいとの認識です。日本でも伝統農業に近い形で，水路を引き，堆肥を入れるのが一番環境に優しいことは決まっています。ヨーロッパでも，やはり伝統農業が一番環境に優しい，となってきている。

だから，その伝統農業が再現できる社会基盤をむしろ社会的に補償する。農民にだけ伝統農業をやれ，あとはソッポをむいていたのでは農民の生活が破綻する。それは国や社会で保障していこう。そのかわり農民には規模拡大や，近代農業の方向ではなく，むしろ昔の技術のいいものを再発見するような農業をやってくれないだろうか，そんな方向に切り変わってきたという事です。それは家族経営規模がいいんではないかという一つの結論。

農村景観がそのままリゾート

それからもう一，これは特に農民には賛否両論ありますが，農山村という社会が維持されていることが都市の維持にとって大変重要だという意見が強くなってきた。どういうことかと言うと，ヨーロッパにおけるリゾート地というのはかなり人工化された所もあります。けれども圧倒的には美しい農山村，それがそのままリゾートなんです。だからきれいな畑があり，きれいな集落があり，伝統的なものがあり，そこで昔ながらの農民たちが生活を営んでいる。そういう景色に触れたとき人間の気持が一番安らぐ。

ですから特別な山や滝などがリゾートではなく，農民がきちっと農業を営んでいる，その場所が都市の人達にとって必要なリゾートなんだ。だから施設は何もないが，それこそ本当に憩いの場なんだという，そういう考え方です。だから農村らしい農村を維持していこう。これが社会全体を健全化するのにとても重要だとの考え方が広がってきている。ですから農村景観を保全することに対してみんなの関心が非常に高い。

不自由さを凌ぐ景観を守るポリシー

しかしヨーロッパの景観に対する施策を日本に持ち込むと，日本では，農村だけでなく都市の人でも，みんな参ってしまうでしょう。というのは，向こうでは伝統的な景観以外の建物を作ることはできません。例えば，農村に真四角なマッチ箱のような建物を作る。そんなことはまず許されない。建てるとしたら元の建物と同じ景観を持っている建物，地域によっては元の建物以上大きいものはダメという地域もあります。中はどうに変えてもいい，けれど外から見たのは元と同じでないとダメだという。そうしてまで景観を維持して

いこうという。

これは都市部でも同じくらいうるさい所があります。私の友人がパリのど真ん中に住んでいます。ある時昔の石積みのパリのアパートの一部屋を買って住んでいた。ベランダがあって，外に鋳物で作ったフェンスがあった。それがある時ポキッと折れた。折れてしまったので似たようなものを買ってきて補修した。ところがアパートの他の住人からクレームがついた。

というのは前のフェンスとちょっとだけ模様が違う。公共の景観を破壊した，と。つまり中はいいけども，外のベランダのフェンスはみんなが外から見る訳です。だから，これは公共財産であって，それをあなたの一存で勝手に変えることは許されない。いや，仕方なく似たものを買ってきて付けたんだ，と説明をしても，とにかく直ちに元のものに復元しろ，復元しないなら訴訟を起こすと言われ，結局，特注で作って，すごい金がかかったと嘆いていました。

しかし，これはフランス人の考え方としては当たり前で，似たものだからいいだろうというわけに行かない。だから，ましてやビルを壊してモダンなビルを作ることは許されない。再開発地域に指定されておればいいのですが。指定されていない限り許されません。だから町場の人も景観保全にはものすごく意識が高いわけです。ですから農村の人だけに窮屈な思いさせるのではなく，みんなでこの景観を守って行こう。例えば，ドイツのある村ではトラクターが畑の隅に野ざらしになっている。どこの家もそう。当然トラクターを入れる建物を作りたい。しかし作らない。作りたいけど作れない。つまり景観，新しいものを作るのが許されていない。だから野ざらしにしてある。この景観を守ることはみんなで合意している，だから，しょうがない。

世界の流れに逆行する日本

つまり，農山村維持は農山村のためだけでなく，都市の人達のためでもある。だから農山村が培ってきた文化は，農山村の人達のためだけの文化ではなく，社会全体の共有財産でもある，と考える。ただ，それを維持するための農民の負担は，社会全体で補填しよう。そこが，日本と違います。

ただ，農業に対する補助金は日本の方が大きい。というのは，日本はまだ依然として生産力増強の補助金を出している。圃場整備など，べらぼうなお金を使っている。ヨーロッパ諸国はもう生産力補助金は使いません。農民が環境を保全しながら伝統的な村を維持するための補助金です。もちろん伝統的と言っても，今はコンピューター時代ですから，昔と同じ生活をしている訳ではありません。しかし農村が培ってきたものを大事にしながら生きていこう。そのためにお金を使う，それが，ヨーロッパのお金の使い方です。絶対額は日本の方が大きい。ただ，先進国の中ではおそらく日本とアメリカだけが依然として生産力増強に金をかけている。

日本にも育ち始めた多様な農

このような先進国がたどってきた農業の流れが，そのまま日本にも当てはまるかは分かりません。しかし，農業が，生産だけでなく，多くの人達が多様な形で農業に携わっていく時代が来なければいけないだろうし，またその方向に行かないとだんだん人間が破綻するのではないかと思います。

現実にこのような動きがどこの先進国でも，前よりは遥かに顕著に出てきている。

日本でもまだ少数かもしれませんが，例えば私の村のような，とんでもない山奥の山村に都市部から引っ越ししてきた人が7，80人います。私が一番不真面目でたまにしか行きませんが、，あとの人はちゃんと住んでやっています。このように都会で暮らすより田舎

で暮らしたいという人達が，本当にどこの山村にもいるようになりました。

また，定住までいかなくても，私のような形で関わる人もいます。さらに，もっと身近には市民農園なんか一生懸命している人もいる。先程の森林ボランティアも結構な数になっている。

このように土や自然，田舎と人間が関わらないと，これから色んな問題が発生するのではないかという気がします。ただ，その時，農業のイメージを勝手に作って，勝手に垣根作ってしまう必要はない。つまり土とか自然を維持しながらそれと関わりながら生きていくのが農業の在り方であって，その形は多様であっていい。実際農民と言われていた人達だって，昔はもっと多様な生活をしていたんだという事がポイントの一つじゃないかと思っています。

（7）農業は，人間交流の職

様々な工夫の楽しみ

ただ私が，「僕も農民です」と言う場合，多少畑を作っているだけではなく，もう一つ，重要なことがあるような気がします。それは，労働すること，生活すること，もうひとつ接客をする，客と対応する，つまり人間同士が交流することです。農業は労働と生活と接客が一体化したものではないかと考えています。

例えば，私は今の時期，朝から晩まで畑にへばりついています。草はどんどん生えてくる，新しく播かなけりゃならないものが沢山ある，本当に口をきく暇もなくやっている。ところが，もう少したちますと，ずっとのんびりしてくる。特に夏のお盆を過ぎれば，本当にのんびりしてくる。畑には出ますがちょっと草を取ったり，ちょっと柵を直したり。あとは畑に座って鳥の声を聞き，春には山の花が咲くのを見る。対岸に少しだけ自分の山があるので，畑を遠くから見ながら昼寝もする。

自然相手に様々な創意工夫

このように暇な時もあるし忙しい時もある。一年をならせば農業というのは結構暇な職業だと思います。農民というのは，暇な時期に色々な工夫に挑戦する。これが楽しい。それはつまらない工夫だったり，自分では大発見した工夫だったり。その工夫の結果の良し悪ししを見ているのは，とても面白いことで，うまくいくと人に言いたくなる。

私も，いろんなことをやっています。殆ど失敗しましたが，一番成功したのが春先に畑の真ん中にちょっと穴を掘り，そこに山から雑木を持ってきて燃します。全部火がまわり終わったくらいでトタンを伏せ，少し土をかける。2日くらい置くと出来損ないの消し炭みたいのが出来ます。その細い鉛筆みたいな炭と灰の混じったのを，スコップで畑にばらまきます。小さい畑ですからどうしても連作になりがちです。これが連作障害にものすごくいい。これはいい薬です。最近炭を入れるのが流行っていますが，自分で簡単に出来て効果があります。

今は木酢液をどう使ったら一番効果的か一生懸命やっています。効果はありますが，これというルールをまだ発見できません。例えば，木酢液を殺虫剤のように使います。木酢液には殺虫効果はほとんどありませんが，バクテリアなどが盛んに育ち植物が強くなり，結果として虫に負けない作物となる。適切な薄め方，入れ方というのが非常に難しい。

僕の場合，農薬を使いません。結局，色々な作物を混植するのが一番いいらしい。一本ずつ変えるのが理想ですが，さすがの僕でもできません。けれど，せめて一列ずつ作物を変えると，結局，虫の被害に合わない。作物によってはヨモギをまぶすと相当防げる。そんなことを，毎年2つ3つは新しいことをやってほとんど失敗して，たまに生き残る工夫がある。これらは農業の上での工夫ですが，もう楽しみの領域です。山に行ってちょっと暇

ができると，片方では鳥の声聞き，花を見て，一方では工夫を考えている。そうやって時間を過ごしているのは労働ともいえるし，生活ともいえる。畑の中に生活がある。

接客の場としての農業・農村

さらに別の面もあります。もともとこちらが暇な時は隣の畑もたいてい暇です。隣の人が出てくるとそこでおしゃべりをする。僕の言う接客というのは，その程度の接客です。また，通りすがりの人が声をかけてきたりして，畑で一緒にしゃべり，帰り道に近くの農家に寄ってお茶を飲む。つまり農業があるので「接客」のシステムがなんとなく出来上がっていく。昔は農業に限らず，労働の中に接客という行為が非常に複雑に入っていた気がします。商人も物を売りつつ，接客もしている。売っているのか接客しているのか，境目のない商人が多かった。何につけても人と人とのつきあいみたいなところがあった。

ところが今は接客が消えて，本当に売り買いだけの世界です。これが労働の大きな変化です。

農業・農村では農地や農業を媒介にして底辺に接客の世界が形成されていく。その点では，僕の農地は立派な農地で，自分の生活の足しだけでなく，僕の農地には毎日一人か二人は必ず村の人が来るから立派な接客の場所でもあります。それに結構都会の友達も遊びにきますから，広い意味での接客の場所でもあります。実は昨日も一人で作業をしていると，都会のある夫婦が遊びに来ました。朝から晩までその夫婦をこき使いました。こき使いながらも交流出来る。

（8）様々な要素を含む農業

自然との有機的な関わり

このように農業の基本にあるものは，一方では多職の民だという事。それからもう一つは農地だけではない，自然全体の有機的な利用の中に農業がある。さらに労働と生活と接客が一体化した世界の中に農業が展開している。ここに農業とは何かを考える基本的な問いがあるような気がします。今，色々な農民とお付き合いをしますと，だんだん農業が不思議なことにこの方向に戻る傾向が出てきている。一方では依然として大規模経営，硬質的な農業政策として行われていますが，一方では有機農業や産直運動をやりながら，「元々の農業とは何だったんだろうか」と考えながら農業をやっている人達とお付き合いをしていますと，結局行き着くのは地域の持っている自然体系を上手に使った農業をやっていこうという方向にきている。

ただ，有機農業にはかなりインチキなものもあって，有機肥料を使えば有機農業，化学肥料に有機肥料をちょっと混ぜて有機農業など，信用しにくいところもあります。

しかし，有機農業の基本は，自然を有機的に利用することです。そこの地域に山があるなら山を，川があるなら川も上手に使う。草木も使う。全ての自然を上手に使う。その中に農の営みを作るのが本来の有機農業だった。今，その点に着眼している農民たちが結構点々と増えてきたと思います。

また，こいう人達は今産直的な動きをしている人達が多い。産直も大規模にやると破綻する場合が多くて，結局少数のお客を相手にしている方が，ずっときちっと行われている。ところが小さなお客様たちを相手にしていますと，結局あるものは加工して出すことになる。例えば漬け物にしたり，ワラビやゼンマイも半加工して出す。

顔の見える交流

そうしますと，今度はお客さんの要望を受けて，昔からその地域にあった，竹細工や蔓細工や細工ものを出す，注文を受けて細工物を作る。これは，新しい形での多職の民の創出です。同時に産直等では，機関誌や通信を

出したり，電話で連絡を取り合ったり，して情報交換をする。あたかもサービス産業のようになってくる。田畑の仕事をしつつ，山のものを取り，加工もし，サービス業的な仕事もする。こんなふうに，また新しい意味での多職性の回復が始まっているのを感じます。

同時に，その買っている客の側の人達も農民と交流しながら，買いながら自分もまた家庭菜園や，森林ボランティアをしながら，つまり自分もまたできる範囲で自然や土とのつきあいを生活の中に組み込むような試みもしている。

持続的産業，水田農業

このように農に関わる全体を見渡しますと，生産だけが農業ではなく，このように広がりをもつ世界こそ農業であり，私たちが回復して行かなければならない農業だという気がします。ですから農業とは何かと考えていく場合に，今ある農業だけではなくて，農業をどう作っていくのか，どう回復していくのかということを含めて，農業とは何かを考える必要がある気がします。

特に，農業が持っている底力，これは言うまでもなく，持続がきくということです。これは大変大きな力です。今は圃場整備がされていますが，日本の農山村の集落と，田畑が合体する景観の原型は江戸の前期から中期にかけて作られています。戦国時代に一度ぶち壊された所もありますので，今の農山村景観というのは，ほぼ江戸初期か，遅いところで中期くらいに原型ができてきました。つまり，日本の農村はすでに3，400年にわたって継続されてきた。さらにそれ以前からも長期にわたって農業が持続的に営まれてきた訳であり，やはり他の産業を考えますと，大変な驚きです。

特に水田の持っている力は大したものです。ひょっとしたら同じ水田で3，400年も連作している所もあるはずです。それでも連作障害を起こさない。全く驚くべき水田の力です。畑ではこうは行きません。つまり，これだけ長期に渡って循環しかつ持続していくような自然の利用ができる。これがやっぱり農の基本である。ただ現在行われている農業が，また同じように何百年にわたって循環し持続できるかどうか。これは甚だ疑問です。

化学肥料だけで，持続可能か

実は今年，私の農業が忙しくなっている理由の一つは，去年の暮れに村の中で引っ越しをして，畑が変わりました。今度の畑は，今まで放置されていた畑です。ところが，3年前くらいに放棄された5，6年前の所，10年前の所，15年前の所がある。その家の人が次第にやめられて，とうとう3年前に全てやめられた。ですから草だらけで大変です。3年前の所は一番楽で，15年前の所では相当木が生えています。開拓農民になったような気分になります。

ところが，労力としては放置年数が長いほど大変ですが，草を取ってしまって土起こしをすると，逆に放置年数が長いほど土がいい。最近まで使っていた所の方が悪くなっている。土が硬い。たぶん土壌生物などが少なく，化学肥料など弊害が出ているのだろうと思います。ですから最近まで使った土地は楽ですが，質が悪くなっている。これが今の農業だなという気がします。ということは，日本中このような農業がこれから何百年にわたって持続するか否かは，全く分からないことです。

3日前，村にいたとき，峠を越えた長野県の大規模農業やっている人が遊びがてら2時間くらい手伝ってくれて，言っていました。その家は高原野菜を作っている。大型トラクターで，表面の土はいつも耕しているけど，30cmぐらい下はコンクリートみたいになっている。30cmから下に水がはけない。ところが，最近またいい機械が出てきて，下の岩盤のような土を叩き割って，またトラクターに乗っ

て上を耕している。一つ買う度に高い。農機具を買うために農業やっているなんて言ってました。

そんな農業が本当に持続していくのかどうか。問題が出てくればそれに対応した技術も出てくる。しかし，果たして本当にこれで大丈夫か，持続できるのかと思います。

循環こそ農業の基本

つまり，農業の基本は自然の循環を損なわないことですし，同時に農業自体が循環的に営まれることが阻害されないということが非常に重要だろうと思います。ですから，持続する農業のためにどうするかが第一義的に重要であり，効率化は，農業の長期的な役割から見れば大した問題ではないのではないか。

ただ，そのしわ寄せを全部農家に押しつけるのではなく，社会的支援が重要だと思います。農業の基本は効率的農業ではなく，循環できる農業，持続できる農業だということです。さらには，持続できる農村地域社会，山村地域社会，つまり村社会自体が長期にわたって持続できるとはどういうことか，またどういう形かを，考えて行かなくてはならない。

今までは，農家収入の増加や，労働の軽減だけを考えてきた。もちろんそれはそれで決して否定されることではありません。しかし，持続できる農業や農村とは何か，そのことを全然考えてこなかった。その為に今や農家そのものが持続するのかさえ怪しくなっている。ですから今までは農業を近代化すればするほど，結局自然に対して敵対的な農業になっていったし，農業の持続性というものも破壊してきたし，村の持続性も怪しくなってきた。どうもこれがワンセットだったように思います。

これからの農業は，自然の持続，農業自体を持続させる，その為には村がどういう持続性を持たなければいけないか，その為にはどんな社会が必要か。村の持続のためには，村の努力だけではなくて，持続のために支援ということも必要になるし，もう一つはただお金をもらえば持続できるわけではなくて，そこに価値を見出していけるような関係を，人間の関係として作っていかなければいけない。

農を共有する喜び

私のところは，山間地農業ですので天候のいい年と，悪い年の変動が激しい。ある家はまあまあでも，ある家は壊滅的になってしまう。今いる10軒くらいの集落で，引っ越す前も10軒くらいの集落なんですけれども，わずか10軒くらいが額を寄せあっている小さい集落でもＡさんの家は全然できなかった，Ｂさんの家はまあまあできたと，結構差ができます。

僕の強みは，天候の悪い年に割に強い。というのは，徹底的に有機肥料しか入れていません。天気のいい年にもそんなに多くはできませんが，逆に天候の悪い年でも結構平年作に出来る。ですから，今年もちょっとワクワクしています。春先からの天候だと，今年夏は寒そうです。この辺りはどうか分かりませんが，僕の辺りは冷害予想が出ています。すると，僕の農業は強いはずで，そういうときに近所に作物をあげる気分ほどいいものはありません。できなかったという話を聞くと，僕の家のをもってったら，なんて言うほど気分のいいことはない。これが，農業をやっていて最高に嬉しくなる時です。

多様性こそ農業

こうやって農業をしていると，楽しいことは決して一人だけでは作れないものなんだ。やっぱりあげる人がいて，食べる人がいて，お宅のはおいしいと言ってくれ，どんな作り方をしたかと言って来る。これこそが本当に楽しみです。こうして，自然に人間関係が上手に形成されていていく。これこそ農業の楽しみといえる。ですから，これから循環でき

る農村社会とか農業を考えていく場合，その農業自身あるいは農村社会自身が持っている価値というものを直接見つけだしていく人々，その意味で交流する人々が絶対必要になっていくだろうと思います。

ですから，これら全部ひっくるめて，実は農の思想というのはあるわけで，話が非常に散漫ですが，同時に農業が散漫にしか表現できない多様性を持ち，またその価値というものも人間の交流とか地域社会の文化だとか，いろんな形でしか表現できない，そういうものも含めて農業の価値があるんだということこそ，私たちが回復していく必要があり，そこにこそ農の思想があるという気がしています。

まことに散漫な話をさせていただきましたが，これで終わらせていただきます。どうも長い時間ありがとうございました。

（第28回総会特別講演　平成９年６月７日）